



[花き部門]

[農業研究所ホームページへ](#)

3. 秋彼岸出荷作型における電照と穂冷蔵及びエテホン処理との併用効果

[要約]

電照・秋彼岸出荷作型において、穂冷蔵あるいはエテホン処理を行うことによって、電照期間中の発蕾及び頂花ブラインド茎の発生抑制が可能である。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 野菜・花研究室

[連絡先] 電話086-955-0277

[分類] 情報

[背景・ねらい]

岡山農研では、コスト削減、軽労働化を目的に、電照を用いた同一品種による小ギクの夏秋需要期連続出荷技術を開発してきた。しかし、電照を用いた秋彼岸出荷作型において電照による花芽分化抑制が不完全であるために、早期発蕾が認められる場合がある。そこで、電照と穂冷蔵及びエテホン（商品名：エスレル 10）処理との併用効果を検討する。

[成果の内容・特徴]

1. 「精こまき」では、電照と穂冷蔵あるいは電照とエテホン処理を併用することで、電照期間中の発蕾を確実に抑制できる（表 1）。
2. 両品種とも、電照と穂冷蔵あるいは電照とエテホン処理を併用することで、頂花ブラインドを抑制できる（表 1）。
3. 「精こまき」では、穂冷蔵あるいはエテホン処理によって発蕾日が数日遅くなる。
4. 「精こまき」では、電照のみでは約90%の茎で二次側枝の発生が認められるが、電照とエテホン処理を併用することによって大幅に減少する（表 1、図 1）。

[成果の活用面・留意点]

1. 白熱灯を畝面から 2 m の高さに、3 m 間隔で設置し、深夜 6 時間（22～4 時）の暗期中断で 8 月 1 日まで電照を行った結果である。
2. 穂冷蔵は、採集した挿し穂を挿し芽時まで 5℃、暗黒条件下に 15 日間置いて行った。
3. エテホン処理は、200ppm 液を摘心時から 2 週間おきに 3 回、株当たり 3～4 ml/株散布して行った。
4. 両品種とも、平均開花日及び切り花長に、処理による大きな差は認められない。
5. 両品種とも、穂冷蔵とエテホン処理を併用することで節数が増加する。
6. 岡山県赤磐市における結果であり、各産地での適応性の検討が必要である。



[具体的データ]

表 1 電照・秋彼岸出荷作型における穂冷蔵及びエテホン処理が小ギクの発蕾日、開花日及び切り花形質に及ぼす影響

品種	穂冷蔵の有無	エテホン処理の有無	電照期間中の発蕾率 (%)	平均発蕾日 (月/日)	平均開花日 (月/日)	切り花長 (cm)	節数	頂花ブライントウ茎率 (%)	二次側枝発生率 (%)
精こまき	有	有	0 b	8/16 b	9/14 a	95 a	71 a	0 a	30 a
		無	0 b	8/15 b	9/14 a	91 a	56 b	0 a	60 ab
	無	有	0 b	8/15 b	9/14 a	92 a	69 a	0 a	40 a
		無	8 a	8/12 a	9/14 a	92 a	53 b	8 b	93 b
精ちぐさ	有	有	0 a	8/17 a	9/16 a	86 a	64 a	0 a	5 a
		無	0 a	8/15 a	9/18 a	87 a	53 b	0 a	10 a
	無	有	0 a	8/17 a	9/17 a	84 a	62 ab	0 a	8 a
		無	5 a	8/16 a	9/18 a	86 a	54 b	4 b	9 a

注) 異なる英文字間にはTukey法 (5%) で有意差有り (比率データは逆正弦変換データを使用)



図 1 二次側枝発生茎と無発生茎

[その他]

研究課題名：周年安定生産を可能とする花き栽培技術の実証研究

予算区分：受託

研究期間：2013～2017年度

研究担当者：森義雄